

国内事例
in Japan

1

地域を主語にして考える・語る・つなげる～ 「田園環境都市ビジョン」策定への挑戦 ／栃木県小山市



ホームページのトップ画像 イラスト：江夏潤一（小山市「おやまアサッテ広場」より）

気候危機、生物多様性の損失、戦争、感染症…。世界で起きている不都合な真実は、そのままシームレスに地域社会にも影響を及ぼし、もはやどこで何が起こるか分からない。これらの課題に対しては、残念ながら全世界共通の解決策はなく、それぞれの地域で現状を分析し、仮説を立て、解決に向けて取り組む必要がある。

その際の旗振り役として真っ先に期待されるのは、自治体の存在ではないだろうか。

「これまでは、トップダウンで降りてくる指示をいかに実現するかに懸命になるのが、自治体職員に求められる仕事だった。それが今は、市民と一緒に、自らが考え、動くことが求められている。」小山市 総合政策部 総合政策課 企画政策係の高橋係長は、今、自分たちが置かれている状況をそう語った。

複雑化し、深化し、山積する課題を目の前に、これまでの自治体の在

り方を超えようとしている、栃木県小山市取材した。

田園環境都市ビジョン

栃木県の南部に位置し、ラムサール条約登録湿地である渡良瀬遊水地のワイズユースに長年取り組んできた小山市。湿地の保全だけではなく環境にやさしい農業になども力を入れ、近年ではコウノトリの定住にも成功している、生物多様性保全に力を入れる自治体のひとつである。

その小山市が、「田園環境都市ビジョン」の策定という、新しい挑戦を始めた。このビジョンは市民と行政が共有する「まちづくりのビジョン」である。令和6年度の完成を予定しているが、作って終わりではない。今後の市の総合計画や各種事業の前提となる方針となり、行政も市民も、このビジョンを対話のツールとして活用し、多様な主体が多層的に関わり合い、それぞれの取組を

実施、まちづくりをしていくことを目指している。

このように行政発信で作られる“ビジョン”などは、行政が作った案について、市民の代表や有識者に意見を聞いて策定し、結局は“絵に描いた餅”になってしまうことが多い。しかし、小山市は、本気だ。プロセスから市民と一緒に取り組み、市民の声からビジョンを作ろうとしている。

手触りのある地域像 ——風土性調査

その一環として、令和4年度から、「風土性調査」というユニークな調査が行われている。小山市内を旧町村の地区単位に分けて、フィールド調査やアンケート、グループインタビューを行い、その地域に住んでいる人たちが、地域の何を大切に思い、何に課題を感じているのかに光を当てる。すでいくつかの地区の調査は完了し、ウェブサイト「おやまア

サツテ広場」に報告書が掲載されており、地域ごとの特性や、暮らす人の想いがとてもよく読み取れるものとなっている。

ひとくちに「地域」と言っても、人が多く住む都市部、自然資源の多い農村部など、それぞれのエリアによって自然環境も、文化も、暮らしも少しずつ違う。この多様性も地域の魅力の一つだが、通常の行政のやり方では、「市民アンケート」のような形で全地域一斉に、一方通行の情報収集を行う場合が多い。しかし、風土性調査は、実際に地域を訪ね、地域の人の声を直接聴き、記録として共有していくことで、手触りのある地域像がビジョンに反映されていく仕掛けとなっている。

「生物多様性」の再発見

これまでの市としての取組から、小山市において「田園」や「環境」という言葉は、渡良瀬遊水地や冬水田んぼ、コウノトリなど、「生物多様性」に関わる施策を連想させるものとして定着してきた。それゆえに、行政内でも「田園」や「環境」が、「自分の担当業務」とどう関わるのか、イメージしにくい職員が多いことも事実である。

しかし、風土性調査からは、改めて多くの人が、「田んぼのある風景」や「生業としての農業」を大切にしていることが見えてくる。さらに、「農地のない都市部における調査でも、「農業についてどう考えるか？」との問いに対し、「詳しく知らないが、関心がある」と回答した人が多く、しかも、その回答の中心は30代であった。この事実には、「農業に関心があるのはリタイア層」であると

も思い込んでいた行政の中に、「なぜ?」「子育て世代だから、もしかしたら食の安全性や教育に関心があるということかも?」など、新たな視点と発想の広がりをもたらした。こうしたことから、「生物多様性とまちづくりのかかわりを、深く考えていく必要がある」と、高橋係長は語る。シンボルとしてではなく、暮らしと地続きの「生物多様性」が見えてきている。

プロセスを通じた行政内部のトランジション

このようなプロセスは、前例はあまりない。どのように市民から声を集めるのか、庁内から協力を得るのか。すべてが手探りでスタートした。なるべく多くの職員に主体的に関わってもらいたい、そもそも日常業務で手いっぱいという現実がある。ポイントとなるのは、「いかに自分の業務と関わりがあるか」を理解してもらうことである。そのためにも、小山市は、ビジョン策定そのものよりも、市民との対話を含めたプロセスを重要視している。

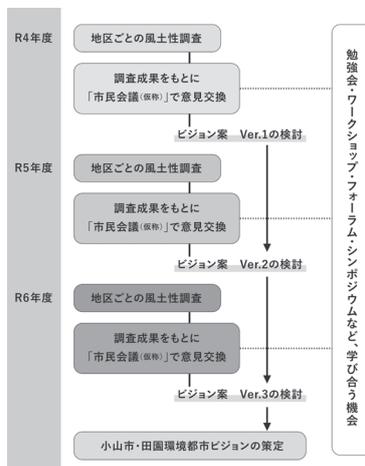


風土性調査の会議の様子

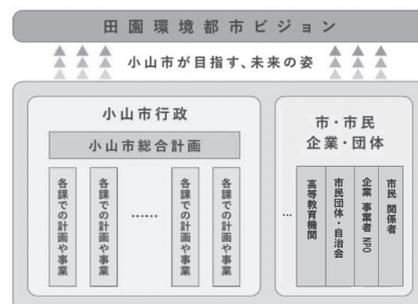
高橋係長は、「他の地域のマネで何とかなる時代ではない。“小山市にとって”どうかを考えることが重要だ」と、地域を主語にして考えることの重要性に触れ、「そうしていかないと、まちが持続していかない。」と続けた。

田園環境都市ビジョンは、「ビジョンそのものも検証しながら、時代や状況の変化に応じて「更新」してゆくべきもの」と説明されている。このビジョンは、人から人へとリレーされていくまちづくりの道しるべである。そのリレーを担う人を、どれだけこのプロセスの中で生み出すことができるか。小山市の田園環境都市ビジョン策定のプロセスは、自治体のトランジションのプロセスそのものでもある。

記事：関東地方環境パートナーシップオフィス（関東EPO）高橋朝美



策定までのスキーム図



ビジョンと行政・市民活動の関係性図